

米分断根底は「民主的」

格差や分断、陰謀論……。新型コロナウイルスが感染拡大した3年は社会のさまざまな問題を浮き彫りにした。宗教や不寛容論の観点から、トランプ前大統領の登場も含めた米国社会を分析してきた東京女子大の森本あんり学長(66)は、パンデミック(世界的大流行)をどう見ているのか。米国でのマスクへの反発の背景として、自己表現を重んじる価値観や「女々しい」といったジェンダーを巡る宗教保守派の主張など4点を挙げ、とっぴに思える陰謀論も「根っこは民主的」と指摘した。

東京女子大学学長 森本あんり氏に聞く

コロナ3年の光景

パンデミックではいつ誰がどこで感染するかわかりません。その意味では平等です。他方で特定の業種には大きな負荷がかかり、明暗がわかれました。

アメリカではマスク着用を巡る分断がありました。反発する理由は大きく四つあり

ます。

一つ目は、表現者にとってのマイナスです。口を隠すとよく話せない。アメリカでは自己表現が大事にされるので、マスクにいろいろ書いたりするでしょう。マスクをした時ですらメッセージなんです。

二つ目は、差別の問題です。差別に敏感な土壌ではマスクの強制が難しい。例えば日本では「高齢者はマスクをしろ」と言っても不思議に思いません。でもアメリカでは年齢差別になります。「女性はマスクをしろ」というのと同じで、

特定の人を特徴付けて強制することになります。

マスクは自己表現の一部ですから自分のアイデンティティの表出とも関連します。イスラム教徒の女性がヒジャブをかぶるのは、信仰の表現であるとともに、イスラム的なアイデンティティの表明です。それと同様に、マスクの着用や不着用を強制すると、表現の自由を脅かす可能性があります。

三つ目は、ジェンダー問題です。(前大統領の)トランプさんが「マスクは女々しい」とよく言っていました。マスクをして権威を避けるのは男らしくないと受け止められるのです。

日本ではなかなか理解してもらえませんが、実はここにアメリカ特有の宗教理解があります。20世紀以降のアメリカのキリスト教はマッチョイズム(男性主義)とつながっています。19世紀の終わりから女性の社会進出で女性教師が増えたりして、アメリカのキリスト教が女性化しました。その反動で、現代の宗教復興(リバイバル)にはいつも男性中心主義の影がつきまわっています。

宗教復興は父親の復権でもあります。保守的な福音派は「ファミリーバリュー(家族の価値)」という言葉を使います。父親が中心にいて、家族を守るという意味です。一方でリベラルの人は女性も自

米連邦議会に集まったドナルド・トランプ前大統領の支持者ら。コロナ下でマスクを着けていない人の姿も見えるワシントンで2021年1月、古本陽狂撮影



立すべきだと考えているから、男性に依存するのは嫌なのです。

だから、「家族の価値」と言うのは南部の保守的な白人のキリスト教徒。米議会襲撃で有名になった団体も男性至上主義です。彼らにとってはそれがキリスト教国アメリカの正しい姿なので、マスクを

して襲撃に加わった人なんていません。四つ目は、個人の権利です。独立宣言にも「生命、自由、および幸福の追求」が「不可侵の権利」としてうたわれている。マスクをしろうたわれている。自由の制約です。だからそういう命令をするバイデン大統領は全体主義だと非難される。マスクをするとしても、自分で決めてする方がいいけれど、政府に言われた途端に拒否反応が起きるのです。彼らにとって命と同じくらい尊いのが個性。キリスト教的に表現すれば魂で、ここにプライバシーの概念が関係します。日本でプライバシーという、肖像権などが思い浮かぶだけですが、アメリカでは私が私であることの権利。先日長年の判例を覆した人工妊娠中絶の問題も、内容はこのプライバシー権です。

南部には、保守的なキリスト教徒が多く住む「バイブルベルト(聖書地帯)」があり、特に南部の人は南北戦争で敗れた連邦政府に言われることを嫌います。日本は逆にお上と言ってくださいという土壌です。同調圧力があるので、マスクを外すにも、みんなの目が怖いから政府が全国一律に言っほしいと。

ただ、政府のやることに疑いの目を向けるのは民主的な社会には必要なことで、民主主義の健全な姿だと思えます。「三権分立」は、権力を持つと誰もが暴走しかねないという前提で作られています。銃を持つ権利も、ワクチンを拒否する陰謀論も、権力への警戒です。政府が銃を向けてきた時、私には対抗するために銃を持つ権利がある。政府のいいなりになるのは民主主義ではありません。陰謀論も権力への健全な疑いで、根っこは民主的なのだと思います。

自己決定は良い面も悪い面もありますが、幸福の追求は自分にしかできない。女性は結婚して子どもを産んで幸せになりなさい、と他人に決められるものではありません。日本では少し時間がかかるかもしれませんが、私の人生だから私がどうしように幸福になるかは自分で決めるという時代になると思います。自分にとって一番大事なことを自分で決める。そういう大きな決断を何度か重ねること、人は大人になっていくのだと思います。

個人の決断尊重する社会に

昔と違い、今は交通や通信も楽で、世界観や文化の違いも出会いやすくなりました。意見が合わない人にも出会えます。でも、相手の言うことが嫌だからといって、暴力やヘイトスピーチで会話を遮断してはいけません。心の底までも付き合えないと思ふことはあるし、そう思うのは自由です。でも、賛成はしなくても、聞き続けるというチャンネルをオープンしておく。私が「不寛容論」で書いた寛容はそういうことです。心の底までも同意することを要求

されたら、それはむしろ不寛容でしょう。同意できなくてもいい。でも、礼節をもって接し続けることが大事です。人間は主人ではなく世界を自由にコントロールできるわけでもない、ということをやや応なく感じさせる3年間で、人生の不条理を感じる機会が多かったと思います。世の中は常に理性的でも予測可能でもない。科学が進歩すれば世界はより良くなるというのは幻想にすぎなかった。なぜあの人は亡くなり、私は生きているのか。そういう説

「聞き手・長野宏美」
—— 随時掲載



もりもと・あんり 1956年、神奈川県生まれ。米プリンストン神学大学院博士課程修了(組織神学)。国際基督教大副学長を経て2022年4月から現職。専門は神学、宗教学。著書に「反知性主義」「不寛容論」(いずれも新潮社)、「異端の時代」(岩波書店)など。

情報お寄せください

連載「コロナ3年の光景」の感想や記者に取材してほしいことを「つながる毎日新聞」(https://mainichi.jp/tsunagaru/)にお寄せください。専用フォームとLINEがあります。今後も、新型コロナウイルス感染症に関する当事者の声や浮かび上がっている課題について、取材を続けます。

もっと知りたい

